

討論メモ

「香港動乱と日本のできること」

令和元年 12月17日

1. 12月は表題について考えてみることにしました。最初に、森田より、

- ① 動乱の経緯
- ② 動乱の背景
- ③ 香港の存在意義
- ④ 諸外国の反応

について、会員専用ページに掲載された資料に基づいての説明があった。

また、香港動乱は、米英対中国の対決の可視化ともいえる緊迫した情勢にも関わらず、日本は政官財とも発信せず、沈黙を保ったままである。中途半端な姿勢を取り続けることは許されない情勢ではないのか、との疑問も提示された。

2. 引き続き出席者6名による討論に移り、下記のような意見が出された。

- ・香港華僑は世界中に広がっており、ネットワークも持っている。米政府に対しても強い影響力を持っているのではないか。
- ・香港動乱と宗教はどんな関係があるのだろうか、同じ抵抗運動でも、仏教のチベットは穏やかで、イスラムのウィグルは戦闘的との印象がある。
- ・中国はウィグルの反乱が怖いので、香港では強力な弾圧は控えるのではないか。
- ・香港動乱は台湾への影響が大きい。来年1月の総統選では、親中派は後退し、苦戦を伝えられていた民進党の蔡英文が有利になっている。
- ・アメリカは国益で動く身勝手な国だ。どこまで本気で香港を救うのか、疑問だ。
- ・アメリカは中国の台頭が怖い。出る杭は叩くの観点から香港の保護に乗り出している。
- ・返還から50年たてば、「一国二制度」を約した英中合意も期限切れとなる。中国は50年待つのではないか。
- ・米中の狭間にあって日本の対応は難しい。
- ・中国の技術の進歩は早く、産業競争力は強い。
- ・しかし、国家が補助しており、公正な競争とは言えない。

- ・中国は多民族の膨大な人口を抱えている。独裁の今の体制が一番良いのではないか。
- ・なんといっても人口の多いのは力だ。
- ・しかし、まとまってこそその力だ。強権体制が崩れバラバラになれば力を発揮できない。
- ・歴史的に漢民族の王朝は少なく、民族も混血してきている。

・北京や上海ばかりが注目されるが、地方に行けば九割方は土漠だ。農民は豊かになったのだろうか。

- ・中国人は商売がうまい。
- ・援助を受けるときには低姿勢でも、立場が逆転すると手のひらを返してくる。

- ・日本政府は腰が引けている。まったく発信がない。
- ・マスコミも事務的な報道しかしない。
- ・マスコミは台湾への影響も報じない。

- ・アメリカは技術の管理に本格的に乗り出している。

- ・香港の生き残る道は金融しかない。
- ・香港上海バンク（HSBC）は世界のトップクラスの銀行で、香港への影響力も大きい。

- ・中国は確かに大きな市場だが、為替管理をしており、外国企業は利益を持ち出せない。

- ・日本は米中の橋渡しを目指すべきだ。
- ・桜を見る会で騒いでいる時ではない。
- ・日本が海外に発信するには、憲法改正と軍隊の保持が必要だ。
- ・日本は中国に精神的に侵略されている。
- ・左翼が衰退しているのは歴然としているが、香港問題は右翼も沈黙している。
- ・世田谷左翼では実行力がない。
- ・台湾を支援するのが大事だ。台湾は日本の友好国だ。

・米、英、EUとも中国の全体主義に対決する意向を鮮明に打ち出している。香港動乱は米英対中国の対決の可視化だ。日本は現在のような曖昧な態度では済まないことをはっきりと認識すべきだ。

- ・かつて官僚は日本のシンクタンクだったが、今や既得権益にしがみついただけで、頼りにならない。発信力もない。